



公民館における環境地図作り講座の意義と展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本松, 宏章, 氷見山, 幸夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010427

公民館における環境地図作り講座の意義と展望

本松宏章^{*)}・氷見山幸夫^{**)}

^{*)} 上富良野町立上富良野小学校

^{**)} 北海道教育大学旭川校地理学教室

The Significance and Prospect of Environmental Map Education in Public Halls

Hiroaki MOTOMATSU^{*)}, Yukio HIMIYAMA^{**)}

^{*)} Kamifurano Elementary School

Kamifurano, 071-0552, Japan

^{**)} Institute of Geography, Asahikawa Campus

Hokkaido University of Education

Asahikawa, 070-8621, Japan

Abstract

Primary and secondary education in Japan is to undergo a major change in April 2002, as a 'synthetic study' and the 'five-school-days a week' rule are scheduled to start. Under such circumstances, public halls are exploring their new roles in social education of school children, while schools are investigating in new ways and items to teach in a 'synthetic study'. Their challenges used to be separate, but their cooperation and mutual interdependence are now growing. This paper focuses on the case of the 'environmental map education', which is becoming increasingly popular in Japan, in the context of social study as well as 'synthetic study', examines the actual practices of it in an elementary school and in two public halls, and discusses their achievements, significance, and prospects.

Keywords : 環境地図学習 (environmental map education) , 地域学習 (area study) , 総合的学習 (synthetic study) , 公民館 (public hall) , 生涯学習 (lifelong learning)

はじめに

平成10年12月に小学校の学習指導要領が改訂された。学校の週休2日制や総合的な学習の時間の創設を柱としたこの学習指導要領にもとづく新教育課程は、3年間の移行期を経ていよいよ平成14年度から実施される。これに伴い各小学校は創意工夫をしながら総合的学習の実践に取り組

んでいる。その中には、子どもたちの住む身近な地域の学習をテーマにカリキュラムの開発を進めているところもある。例えば筆者の一人が在職する上富良野町立上富良野小学校の「とちかだけ学習」や吉田（2002）が紹介する南茅部町立磨光小学校の「ふるさと学習」、寺本（2001）がその著書の中で取り上げている「まちづくり学習」などである。これらの学校では概ね、次の二つの学習内容からカリキュラムが構成されている。一つは、地域の調査観察、即ち地域への認識を深めるという内容であり、もう一つは、それによって得られた知見による子どもたちの主体的な行動、即ち地域への働きかけという内容である。そしてこれらの学習を通し地域への愛情を育もうという理念が根底にある。

一方、社会教育の一翼を担う公民館においても同様の取り組みが模索されつつある。旭川市神楽公民館で平成9年より毎年開かれている「環境マップ作り」講座も、地域の再認識と子どもによるまちづくりへの提案を目的としている。旭川市江丹別公民館でも平成13年に「サマースクール2001たんけんマップづくり」が開催され、環境地図作りを通して地域の子どもの健全な成長を図る活動がはじまった。この両公民館の取り組みには、北海道教育大学旭川校の学生も主体的に参加しており、公民館を絆とした各世代間の交流という面でも興味深い。

また、一般市民の間にも、地域に関心をもちその発展に積極的に関わろうとする人々が増えてきている。2000年に旭川で開催された「環境地図教育フェア2000」の市民シンポジウム「地域の環境宝さがし」には、西神楽地域づくり研究会の餌取清次氏がパネラーの一人として招かれ、同研究会が行った「美瑛川辺別川さと川マップ」づくりと、地図を活用した地域づくりを紹介した（餌取清治，2001）。このマップには、河川流域の自然環境ならびに景観、地域にある史跡や歴史的建築物などが写真や絵によって描かれ、郷土の施設の取り組みなどが一目でわかるように工夫されている。

本稿は、こうした身のまわりの環境を見直し地域に主体的に関わっていこうとする社会的な動向のうち、神楽公民館と江丹別公民館で行われている環境地図作りを紹介するとともに、それらにより望ましいあり方について述べる。この両公民館の新たな活動は、1991年から始めた「私たちの身のまわりの環境地図作品展」（以下「環境地図作品展」と略記）の標榜する環境地図学習を取り入れたものであり、今後の公民館における子どもを対象とした教育のあり方に示唆を与えるものである。

I. 小学校における地域を見直す教育の改善動向

1. 総合的な学習の時間の新設

学校では総合的な学習の時間が創設され、新しい教育がはじまっている。したがって、子どもを対象とした公民館における社会教育について語る場合にも、まず対応する学校での学習がどのような意図をもち、どんな内容を扱っているかを知ることが重要である。

総合的な学習の時間の創設は、①各学校で地域や学校の実態に応じた特色ある活動を行えるようにする、②子どもたちがこれからの社会に生きていくための「生きる力」をよりよく身に付けることができるよう学校カリキュラムを改善する、ことを大きなねらいとしている（本松・氷見山，2000）。学習内容は、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などを扱い、自然環境やボランティア

ア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を行うよう例示している（文部省,1998）。

このような幅広い枠組に沿って、各学校はそれぞれ学習内容を検討し、独自にカリキュラムを作成している。例えば、吉田（2002）が紹介する磨光小学校の「ふるさと学習」では、南茅部町の自然、産業、社会、文化、施設、人などを学習内容とし、問題解決型学習や体験学習を通し、課題をもって生き生きと活動に取り組む子を育成することをねらいとしている。この磨光小学校をはじめ、総合的学習で地域を扱う学校は多い。旭川市立江丹別小学校などの所謂都市周辺部の学校や町村の中心校などである。次に、上富良野小学校の総合的な学習の時間の実践をあげよう。

2. 上富良野小学校の総合的な学習の時間

北海道中央部、十勝岳西麓に位置する上富良野小学校は、児童数494名の上富良野町最大の小学校である（平成13年2月現在）。同校では総合的な学習の時間を「とかちだけ学習」と名付け、地域の特性を生かした中で、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心にもとづく学習をすすめる時間としている（上富良野町立上富良野小学校, 2002）。平成13年度の「とかちだけ学習」では、3～5年生が地域に関する学習をした。3年生は町内の日の出公園の自然、4年生は町の代表的な花であるラベンダー、5年生は水に関わる内容である。以下、それぞれの学年の学習を簡単に述べる。

1) 3年生：日の出公園の自然

3年生は、社会科の「まちたんけん」単元の教科発展型学習として日の出公園の自然を追究する活動を行った。日の出公園は学校から10分ほど離れた場所に位置し、日の出山という山を中心にアスレチック場やキャンプ場があり、春にはラベンダーが咲き、冬にはスキー場になるという身近な遊び場である。子どもたちはここで自分の関心のある草花・木・虫・土・川を調べ、それらをもとに「日の出公園大自然マップ」を作り上げた。発表会では、子どもなりに興味をもった虫や花などを一生懸命に紹介している姿が見られ、自分たちの作った地図を町内外の人知ってもらい取り組みを行いたいという声があがった。

2) 4年生：ラベンダー

4年生は、町の花であるラベンダーの栽培に取り組んだ。栽培の方法や花の加工の仕方を地域の人に聞き、教えてもらいながら実際にそれらを体験していく中で、地域の人が町おこしという願いを持ってラベンダーの栽培や販売を行っていることを学んだ。また、栽培したラベンダーから蒸留水を作り、試行錯誤を繰り返しながら作ったラベンダー石鹸や、におい袋、かざりなどを町内の老人施設の方々にプレゼントし交流した。

3) 5年生：水

5年生は自分たちが飲んでいる水に関する調査をした。水は人間にとって最も身近な環境の一つである。しかし、十勝岳の豊富な湧水を水源とし、水不足や水質などの問題の少ない地域で生活している子どもたちは、水を確保するための社会的な仕組みやその仕事に従事する人々への理解、河川やそこに生息する生き物への関心など必ずしも高くはなかった。そんな子どもたちが浄水場やダム、水の使用量、用水路や河川的环境などを学び、地域の人に向けてポスターセッションを開くまでに至った。

3. 学習内容としての地域の見直し

このように、総合的な学習の時間の創設に伴い、それまでは社会科の限られた時間の中だけで扱われてきた地域が、学校で子どもたちが学ぶべき学習内容として見直されてきている。時間が保障され、子どもたちが身近な環境を体験を通しながら、また調査観察しながら学び、自分たちの地域を考える機会を得られたことは好ましいことである。しかし今後、地域のもつ多様性の中から学校教育として何を扱うべきか、という議論も必要である。例えば、上富良野小学校の場合、確かに上述した内容のどれからでも住民の地域への心情を理解したり、地域の中での自分のあり方を見直すことができる。しかし、この3つの内容だけがその地域を理解する方法とは限らない。身のまわりの多様な環境の中から学校教育としてどの内容を扱っていくのかという問題は、地域を扱う際に個々の学校で真摯に検討されるべきである。

II. 公民館における環境地図学習

1. 私たちの身のまわりの環境地図作品展

このような学校の変化に対し、学校を取り巻く地域の諸施設、例えば図書館や博物館、公民館などの社会教育施設における子どもを対象とした教育はどう変化してきているのか。社会教育の一翼を担う公民館における動向を、旭川市神楽公民館と旭川市江丹別公民館を例に述べよう。前述したように神楽公民館は平成9年より、江丹別公民館は平成13年より子どもを対象とした環境地図作り講座を開催している。この講座を紹介するためには、環境地図作りの契機となった「私たちの身のまわりの環境地図作品展」についてまず触れる必要がある。

「私たちの身のまわりの環境地図作品展」は、1991年より旭川を拠点として毎年開催され、「私たちの身のまわりの環境地図」を標榜し、子どもたち自身が身近な環境を直接観察し、記録することを重視してきた（氷見山,1995）。このような児童生徒の地図展は鳥取県をはじめ全国的な広がりを見せ、それぞれ特色ある発展を遂げている（氷見山,2001）。しかし特に旭川の環境地図展は、地図の作成と利用を環境理解の重要な手段と見なしており、子どもたちに地図づくりの楽しさと意義を知らせるといっただけでなく、これまでの地図の読み取りに重点をおく地図教育を改善し、身のまわりの環境を実際に調査し地図化して考察するという新しい地図教育のあり方を提案する内容となっている（氷見山,1995）。

両公民館の環境地図作りはこの環境地図展の思想を背景としている。以下に神楽公民館の環境地図作り講座を紹介しよう。

2. 神楽公民館の「環境マップ作り」

神楽公民館では、公民館講座の一つとして平成9年より毎年「環境マップ作り」が行われている。期間は夏休みの2日間で、近隣に住む小学3～6年生10～12名が参加している。講座には北海道教育大学旭川校地理学教室の学生や同校の生涯教育課程の学生も指導員として加わり、筆者の一人である本松も北海道教育大学大学院生の佐藤太一氏とともに講師として携わってきた。同公民館がこの講座を開催しているのは、環境地図学習に関心をもつ館長の森協啓好氏の考えによるところが大きい。同公民館から発行された「環境マップ作り」（2000）には、講座の目的が次のように書かれている。

地図は、位置、方位、距離、時間、存在物、音の大きさ、臭い、産業、生活、環境その他無限といってもいいほどの情報量が表せます。私たちの生活の中で、地図のない生活は考えられないほどです。そんな地図のもつ特色を生かして、子どもたちの個性や、物の発見の喜び、表現方法の多様性、他人への共感などから、旭川の再発見や未来への視点へとつなげていきたいのです。そして身体全体で感じる喜び（見る・知る・感じる等）を知ること、地域に親しみ、豊かな感受性を育てることにもなっていくのです。そんな地図を作る作業を通じて、人と人とのつながりを作っていくことが目的です。

即ち、同公民館で行われている環境地図作りは、地図作りを通し子どもたちに地域を再認識してもらうこと、地域への愛情を培うこと及びコミュニティの形成を期待しているといえる。このことは、同公民館で行われている「歴史と碑めぐり講座」や公民館周辺にある見本林という森林の調査を含む「三浦綾子・人間と風土」などの事業からもうかがえる。

3. 「環境マップ作り」の実際

神楽公民館の講座の内容を紹介する。2日間の講座は、氷見山（1996）の環境地図作成のプロセスに沿って行った。即ち、①計画立案、②調査準備、③調査観察、④記録、⑤地図作製、⑥地図読み取り・説明である。タイムスケジュールは表1を参考にされたい。小学生を対象にした環境地図作りの詳細は本松・氷見山（2000）で既に述べているが、講座の限られた時間内に学習を行うため、幾つかの点で工夫する必要があった。以下に小学校で環境地図学習を行う際と異なる点を記述する。

表1 夏休み環境マップ作り講座の日程

1日目	13:30~13:35	自己紹介
	13:35~14:00	環境地図の説明 調査テーマの決定
	14:00~16:00	調査観察
	16:00~16:30	地図の作り方の説明
2日目	13:30~16:00	地図作り
	16:00~16:30	発表会

1) 計画立案（写真1）

調査範囲は公民館周辺の狭い範囲に限られる。神楽公民館は幹線道路沿いに立地し、近辺には広大な商業地域や大雪アリーナなどの公共施設があり、近くに森林もあり、忠別川・美瑛川など市内では比較的大きな川も流れ、様々な事象を調査することができる。しかし調査の時間が3時間程度に限られるため広い範囲の調査は望めない。そのため付近の限られた範囲の白地図を用意し調査範囲とした。また、講座に参加した子どもたちと自己紹介をしあった後、最初の意欲づけ（導入では環境地図展に出品された作品を紹介したり、調査のVTRなどを見せた）から子どもが調査のテーマを絞り込む時間がそれほど保障できない。そのため、平成12年の講座の際には幾つ

かのテーマをこちらで提案するという方法をとった(表2)。平成13年の講座の際は「ドッキリマップ」という観点に絞り、子どもたちに街で発見したこと、驚いたこと、びっくりしたことを記録するよう指示した。

表2 夏休み環境マップ作り講座のテーマ(平成12年)

-
- 感じるマップ：耳、鼻など五感をはたらかせて感じたものを地図にする。
 - 将来残したいものマップ：自分が大切に感じるものを地図にする。
 - いらないものマップ：自分がいらないと思うものを地図にする。
 - 危険地帯マップ：事故がおりそうな場所を地図にする。
 - 公衆トイレマップ：公衆トイレの様子を地図にする。
 - 公衆電話マップ：公衆電話の様子を地図にする。
 - 動物マップ：まちで出会った動物の様子を地図にする。
 - 自動販売機マップ：自動販売機の様子を地図にする。
 - ガーデニングマップ：ガーデニングをしている家の様子进行地図にする。
 - のぼり(旗)マップ：道路沿いの様々な旗やのぼりを地図にする。
 - 信号・点字ブロックマップ：信号や標識、歩行者用点字ブロックの場所を地図にする。
 - 食べ物屋さんマップ：昔と今の食べ物屋の立地状況を地図にする。
 - 樹木マップ：見本林にある樹木を地図にする。
-

『環境マップ作り』(旭川市神楽公民館, 2000より)作成

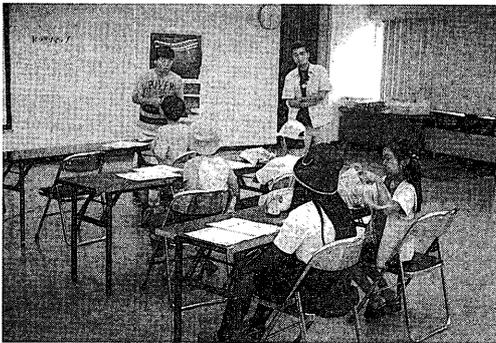


写真1 環境マップ作り講座

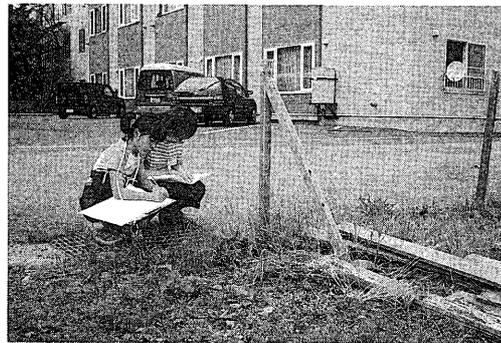


写真2 調査観察の様子



写真3 地図作成の様子

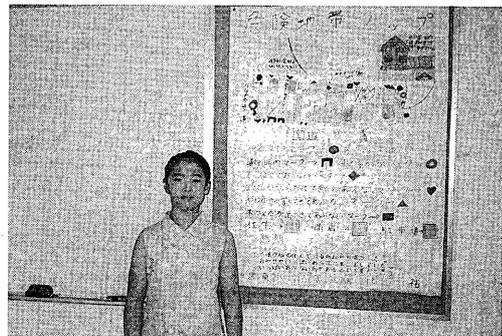


写真3 子どもの作った環境地図

2) 調査観察、記録 (写真2)

実際の調査観察活動は、大学の学生がボランティアとして加わっていることもあり、子ども2人程度に学生1人が指導員としてつく理想的な形がとれた。参加した子どもたちの中には調査観察や白地図への記録に慣れておらず戸惑う子どもも少なくなかったが、安全に気を配りながら一緒に歩き、街の中の様々な事象に注意を促し、子どもと大学生がお互いの調査用紙に記録し合い、楽しく会話をしながら活動を行うことができた。学生にとっても子どもたちと身近に交流する機会は少なく、貴重な体験であったという感想を述べていた。

3) 地図作製 (写真3, 写真4)

講習会は、1日目が調査観察、2日目が地図の作製である。環境地図作品展に出品される小学生の作品の多くはすべてが手書きであるが、作業時間が限られるため、調査範囲の白地図のコピーを模造紙の中央に貼り、そこに絵の具やマジックをつかって調査内容を書きこむという手法をとった。地図への表現は小学生にはかなりの困難が伴うが、調査観察と同様に、学生指導員が自分の担当している子に懇切丁寧な励ましを与えてくれ、子どもたちの意欲を持続させることができた。

III. 公民館における環境地図作りの意義と展望

1. 公民館における環境地図作りの意義

神楽公民館の環境地図作り講座は、今後の社会教育施設における子どもを対象とした教育を考える上で私たちに幾つかの示唆を与えてくれる。

まず一つは、公民館が主体となって環境地図作りに取り組むことで、公民館が子どもたちの地域学習の有用な場となり得るということである。神楽公民館の職員によれば、例年講座の参加希望者が多く人数を制限しているという。講座をはじめて4年目を迎える今回も参加した子どもたちの環境地図作りに対する意欲は高く、楽しげに調査を行い地図に表現する姿が見られた。中には昨年に引き続き参加した子もいた。

神楽公民館と江丹別公民館において子どもたちが作った地図は環境地図展で「公民館コーナー」として特別展示された。地図作りを通し、身のまわりの環境について興味をもった子どもも少なくない。江丹別公民館の環境地図作りに参加した6年生の岸本亜耶乃さんは次のような感想を書いている。

私は、このたんけんマップで、江丹別の畑を調べました。私たちは、西里と中央にわかれて調べました。私は、西里の方に行きました。西里は、中央より人が少ないけれど、そのかわり畑の面積がすごく多かったです。私は、表を作っている時に二番目に多いのは、牧草だということに気がきました。私は、牧草がこんなに多いなんて、ぜんぜんわかりませんでした。何回も、その道を通っているのにどうして気付かなかったのだと思いました。(中略) 私は、江丹別の地図をもぞう紙に書くというのは、学校をのぞいて、初めてなので、とてもいい経験ができました。そして、私の知らない江丹別が知れてよかったです。

(旭川市江丹別公民館編, 2001)

この感想を見てもわかるように、公民館での環境地図作りは、子どもたちが地域への認識を高める上で有効な取り組みであるといえよう。

もう一つは、このような環境地図作りを通し公民館を絆として各世代間の交流が図れるということである。小学生と大学生が共に歩き、街の様子やそれぞれが発見したことを語り合う姿はとも微笑ましいものであった。後の感想でも小学生・大学生ともによい勉強になったと述べている。江丹別公民館の環境地図作りに参加した北海道教育大学旭川校の学生である石垣暁子さんは次のような感想を書いている。

私は、小六の女子二名のグループについていたのですが、二人とも自主的にテーマの設定から調査・地図の作製まで行って、私の方が教わることが多くあったように思います。参加してくださった小・中学生の皆さんと一緒に地図づくりを行って、私自身学ぶことが非常に多くあったと実感しています。また、地域の方々との話し合いやふれあうことができ、とても多くのことを学ぶことができました。

(旭川市江丹別公民館編, 2001)

石垣さんは江丹別に住んでいるわけではなく、大学の公民館実習の学生である。今後、このような学生だけではなく、冒頭で述べた地域に関心をもつ一般市民と子どもたちが、身近な地域の地図を一緒に作り、環境を考え合う機会をもつことができたなら我国の将来も明るいだらう。公民館はそのような活動の中核となり得るのである。

2. 今後の公民館における環境地図作り

上述のように地域学習の見地からも有用な環境地図作りを他の公民館にも広げていくためには、地図作りを知る大人の指導者の確保が不可欠である。神楽公民館と江丹別公民館で行われた環境地図作りは、学生の協力なくしては成立しなかった。このような環境地図学習が社会教育の一環として各地の公民館で行われるようになるためには、環境や地域に関心をもつ住民の協力や参加をうながしていく必要がある。公民館での環境地図作りは、子どもの取り組みやすさから考えても小人数による活動が好ましい。現在数少ない公民館で行われている環境地図作りをこれから社会にどう宣伝し、その協力を求めていくか、裾野を広げる方策がまず今後の課題である。

また、いかに環境地図作りという素晴らしい手法を取り入れたとしても、2日ほどの日程では地域の深い認識には至らないのではないかと、という懸念がある。もちろん、先に紹介した子どもの感想にもあるように、地図作りをすることで、普段何気なく見ているものを改めて考えることの大切さを気づかせることはできる。環境に対する認識を改める契機にもなり得る。しかしながら、環境への興味・関心を育みながら、自分がテーマとするものをじっくりと調査観察し、表現し、考察するという学習のためにはあまりにも時間が少なすぎ、表層的な事象の把握にとどまり、より深く環境を見つめ直すところまでは至っていないのが現状である。公民館において作成された地図と環境地図展に出品されている他の作品とを見比べてみてもそれはうかがえる。この点では、先に紹介した学校での学習の方が、環境や地域についてはるかに子どもの認識を深い面まで掘り下げ、事象を丁寧に扱い、地域への愛情を育てている。また、それらを基底にした子どもたちの地域への働きかけという面でも進んでいる。

しかし、公民館における環境地図作りがそこまで踏みこめないかということ、そんなことはない。公民館は学校よりも各世代間の交流がもちやすく、その取り組みにも自由さがある。この4月より学校の週休2日制が導入され、子どもたちが地域で過ごす時間が増える。このような状況で、子どもの教育において社会教育の果たすべき比重が大きくなることは言うまでもない。週末だけ

の学習になるかもしれないが、1ヵ月～半年の期間の中で、今最も重要な環境や地域という面で各地の公民館が子どもの教育に付与することができたなら、それは社会的にも非常に有益なことである。

神楽公民館では、平成14年の環境地図作り講座の期間を3ヵ月にのばし、近くの旭川市立神楽小学校と連携しながら実施する計画を立てているという。同公民館の取り組みは今後の社会教育の一つの方向性を示しているといえよう。

おわりに

生涯教育という観念が社会に根付いてすでに久しい。子どもたちの将来を考える上で、学校教育と社会教育は切り離して考えるべきものではなく、互いがそれぞれを補い、ともに充実を図っていくべきものである。神楽公民館・江丹別公民館で行われた環境地図作りは、学校を取り巻く社会教育施設における子どもたちの教育の一つのあるべき姿を示唆している。環境を考え、地域を支える子どもたちの育成に向けて、本稿がその一助となれば幸いである。

謝 辞

本稿はセンターの平成13年度助成研究「環境地図教育の深化と普及」（代表：氷見山幸夫）の一部をまとめたものである。

文 献

- 1) 吉田正生 (2002) : 「ふるさと学習」の可能性. へき地教育研究, 第57号, 北海道教育大学へき地教育研究施設. (近刊)
- 2) 寺本 潔 (2001) : 総合的な学習で町づくり. 明治図書.
- 3) 餌取清治 (2001) : 西神楽ふるさとマップ作成活動について. 環境地図教育, 第2号, 19~21.
- 4) 本松宏章・氷見山幸夫 (2000) : 小学校の社会科・総合的学習における環境地図学習の意義と展望. 北海道教育大学旭川校生涯学習教育センター紀要, 第3号, 61~70.
- 5) 文部省 (1998) : 小学校学習指導要領. 文部省.
- 6) 上富良野町立上富良野小学校 (2002) : 平成13年度研究集録. 上富良野町立上富良野小学校.
- 7) 氷見山幸夫 (1995) : 環境・地図教育の地域ネットワークと教育大学の役割. 生涯学習叢書IV, 北海道教育大学旭川校, 229~234.
- 8) 氷見山幸夫 (2001) : 生涯学習の視点から見た環境地図展の意義と展望. 北海道教育大学学習センター紀要, 創刊号, 53~62.
- 9) 森脇啓好編 (2000) : 環境マップ作り. 旭川市神楽公民館.
- 10) 氷見山幸夫 (1996) : 環境地図作品展の特長と意義. 私たちの身のまわりの環境地図作品展実行委員会編, 私たちの身のまわりの環境地図づくりマニュアル, 8~10.
- 11) 旭川市江丹別公民館編 (2001) : サマースクール2001 たんけんマップづくり. 旭川市江丹別公民館.